

原田技術監、平山准教授が講演

愛水ボランティア 発足10周年記念で

愛知県企業庁を退職した水道実務経験者で組織する「愛水ボランティア」が今年度、発足から10周年を迎えた。8月29日には名古屋市内のアイリス

愛知で原田宏・同庁技術監と平山修久・名古屋大学減災連携研究センター准教授による記念講演会が行われ、同ボランティア会員や企業庁および県内の水道事業体職員ら約110人が参加した。

報収集、応急給水活動などを支援する。平時においても豊富な経験を活かして、防災訓練や水道事業体職員との技術交流、さらには水源地の環境保全や水道啓発活動など、活躍の幅を広げている。

愛水ボランティアには約100人のOBが登録し、大規模地震の発生時には企業庁と連携して情

伊藤和義・世話人代表の冒頭あいさつに続き、原田技術監は間所陽一郎・企業庁長の祝辞を代

読。「南海トラフ地震の発生時には、初動体制を早期に確立できるか否かがその後の応急対応に大きく影響する。その点で愛水ボランティアの支援

活動は非常に重要」などと期待を寄せた。

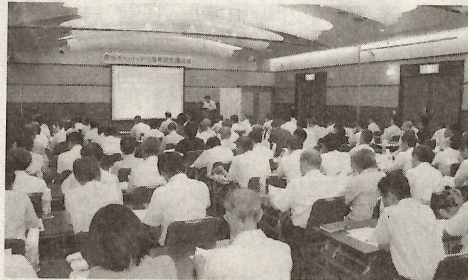
講演では原田技術監が『愛知県営水道地震防災対策実施計画』をテーマに、想定震源域の見直しや社会情勢の変化を織り込みつつ、1週間程度での応急給水、2週間以内の平常給水を目指し進めている施設整備やソフトウェアの取り組みなどを紹介。

「市民生活や社会経済活動を平常時と同じレベルで支える社会的責任を果たすこと、組織への社会的信頼を守ることが危機管理の2大目標」と強調。目標に向けて自らの

尾張旭出張所で整備が進む『広域災害水道応援活動拠点』が来夏、一部

供用開始することにも言及し「完成後の運用方針や効率的な活用の方針が今後の検討課題」などと説明した。

平山准教授は「南海トラフ地震に備える災害レジリエントな水道事業」と題し、危機管理マネジメントの考え方、熊本地震で得た教訓、被災時にいち早く復旧できる「災害レジリエント」な水道の構築のあり方などについて解説した。



現役とOBの連携密に、災害対応力の向上へ

リソースを管理する「目標による管理」手法で業務を着実に進め、住民や職員の生命、水道施設をはじめとする資産をいかに守るかに焦点を絞るべきなどと持論を展開した。



原田技術監



伊藤世話人代表



平山准教授